

社会交変換論Ⅳ：連関（２・前提と諸論点）

長谷川 博

はじめに

「あれこれの先行研究から、しかじかである」ということの終焉を叫ぶ者は、そう叫ぶときに、「伝統がすべてを汲み尽くしてしまっているとすると、ノイラートの船(マーケティング論の世界)はこれからどんなものでありうるのか」を、1番大きな問題意識として果てしなくする。つまり、学問を職業としない学問領域を否認や黙認もせず、本論前稿以後の内容を一旦踏み止めた位置に本稿がある。

あるものはあり-ないものはない、AはAであり-非Aは非Aである、1は1であり-多は多である、言われたことがあり-言われていないことはない。といわれれば、ないものがあり-あるものがない、非AはAであり-Aは非Aである、1は多であり-多は1である、言われたことはなく-言われていないことがある、ともいわれる。これらは相伴いながら、厳密化され非厳密化されている。厳密科学者は厳密科学記号のみで、非厳密科学者は非厳密科学記号のみで考えることができない。そして、一言化や言説化の言語ゲームは、それがいかようであれ、砕かれようともすれば拒絶されようとする。

さように科学しかり、人間本性のこの進化過程において、変化との関係である時間の「共時/通時」の制約下で、つぎの連関がある。①観念論的、言語論的、解釈論的、身体論的という転回があった「存在-認識」論、②形式(「非客観」をより「客観」にする[付値された、通常にはオーソライズされた所記が代入された]記号間の統語・統辞次元)-内容(意味次元と語用・実用次元の過小あるいは過剰な解釈である「発話/書記・認め」、③「全員(各員)にならない全体(部分)-全体(部分)にならない全員(各員)」としての接近(公理化

可能か不可能か、主観を捨ててかかるか客観を捨ててかかるか、現象と所記の間の非明示的関係の「唯名-実念」的な同一性すなわち規約「依存/刷新」的な共通了解の「自覚/無自覚」、理解における「純化-応用化」、通常にいう非対称的因果-結果を思い描き生じた目的の原因化をいう対称的な逆引き因果)。

本稿は、上記の連関を構成し、社会、組織、交換、変換という類概念の述語的属性であるマーケティング組織の「現象理解-原理」を照準とした結論に向かう前提を明らかにする。まずは、われわれの「存在-認識」論がいかほどのなにであるかを言及する。つぎに、規範的な存在-認識論である方法論に言及する。そして、代替的と目されることもあった科学観が含意された接近に言及する。

本論の特殊用法記号につきがある。ごく通常様の括り——本論にもそうしている箇所はある——であるような「 \cdot 」はこれにより括られた対象の記述/説明が暫定の信憑であることを、 $\langle \cdot \rangle$ はこれにより括られた対象は形而上学の反映からますます厳密になるいかなる学による記述/説明をも超えているということ、 \dots はその前後に分けられたものがどちらもあってあることを、 \cdot / \cdot はその前後に分けられたものの両方またはいずれか一方があることをあるいは「交差」することを、意味する。

1 存在-認識論

なにがある(あるとする)のか、そのなにかとはなんであるのか、そして、そのなにかをどうするつもりなのかにかかわるが、自他(私とあなた)にあるなにかは共有化されている構成物・認識であり、自他にともない——所有や占有をしていないというのではなく——なにかは物自体ないし

自体存在としてある（あるとされる）。また同様に、自にあり他にないなにかと自になく他にあるなにかが、考えられてきた。そして、存在原理（実在論、観念論）と認識原理（合理論、経験論）が相互に結びつけ言及されようとしてきた¹。よって、後述の方法論は、自他にあるなにかと自他にないなにかの現象クラスと、自にあり他になく自になく他にあるなにかの現象クラスとそのメンバーにかかわる。

物（マター）とその既知および未知の性質（1次、2次）という区分は、物質（マテリアル）ないし対象の認識カテゴリである。脳という物質内の過程（事象が2つ以上で構成される事象）で発生する、現象の共通了解や集合意識——不完全一致で構わない——、[辞書的]概念、構造のようなわれわれの構成物は、[非]実体に対比される認識的[非]実体である。認識カテゴリはそうした構成物の判別・同定であるが、「恒常的で自己同一的な実体-名前としてだけある非実体」/「実在-非実在」による識別を怠れば、素朴実在論か観念的実在論となる。

物は、自存しない性質を述語として記述される。ここから、周知のように観念（認識）カテゴリを存在カテゴリにすりかえる過誤・錯視ということがいわれてきたといえる。そこで、その過誤があるゆえに分離を未分に戻そうといわれれば、それとは逆の過誤がある未分は分離するといわれてしかるわけである。いま触れたような物象化や観念化はカテゴリ誤認であるといわれてきたが、つぎのことなどのどちらかからで溜飲を下げるのか。このことにもかわり、後述する「方法の方法」（方法論でもあり認識論でもあるといわれる「客観」的論理システム）がある。①主知（意）論があれば決定論がある、②還元論があれば創発論がある（「環境や構造」-「パワー（力能）・『価値への知／情／意』」——論理学では全体（部分）がもつ性質をその部分（全体）ももっているという「分割（統合）の誤謬」をいう——、③[決定する]なにかの分析論があれば[決定される]なにかの発生論がある、④なにかもかについての適応論があればそれにつけての非適応論がある、⑤主観と客観——主客と略すことあり——の対称性を前提とした物理主義があればその非対称性を前

提とした現象主義がある（事実主義があれば本質主義がある）、⑥観念（直接対象への心・直接経験の実在の鏡としての作用、外界を懐疑しても残る心・知能の中に宿るもの）のリフレクティブ論の限界に対しては言語論（理論語や一般言語の文脈・コンテクストを取り去った意味-観察語や現実言語の文脈に依存した意味、いずれにせよの多義性・文の中での語の意味、言語規約の恣意性）があれば身体に対応してテクスチャライズされる価値世界として人間世界を捉える身体論（心脳寄りの「知／情／意」に非ざる身体寄りの「価値への『感／知／認』」、「幸福論につながる倫理学」-「快樂論につながる欲望論」という価値論）がある、⑦基礎づけ主義があればポスト構造主義や解釈主義（事実=価値論²）がある、⑧「分析論-総合論」があればいずれもの残余論がある、そして⑨個別的事実で世界が記述し尽くせるという考え方があればその数はわれわれが哲学するとき思い描くもの数よりもはるかに少ないという厳密な数学的証明まであるといわれた。

ここから促されるまでもなく、やむない自然な「絶対／相対化」に乗じる宣揚をうけた「絶対／相対化」があり、われわれも展望がひらけてみれば、1か2（多）かという、かねてからのパラドクス（矛盾、謎）はやはり終焉している。断れば、われわれは、頑とした、1元論派でも2元論派でも多元論派でもない。「1（内部=外部） \supseteq 多かつ多 \supseteq 1」であること——無限がいくつあるか（ n は「1」が n 個）というのは、厳密-非厳密な記号作用のもとにある人間たち——を対象の性質とする包み披き（enfold-unfold）原理の経験法則化がある。

そして、このことを、自然[科学]的存在論³は、つぎのことをまずは容認することで明晰化できるとする。①「物質系-生命系-『人間-組織-社会の系』-技術が宿る物質系」という物質ないし対象の延長されたシステム階層、②その各階層での新規性や法則の「創発／潜没」、③法則からの「はぐれ」である偶有性・偶有的性質、そして④付加階層での潜没法則に由来し獲得され固有化されたがためにもはや関係的ではない「はずれ」の偶有性。自然[科学]的存在論は、すべての物質ないし対象について、個人差のような固有な性質のことでは

ない、法則律的な、本性・本質的性質があると仮定する存在論である。後稿で問題視することにはなるが、ここでいう法則にも、2つ以上の「量／質」の恒常・持続的關係の形式や共通の事実といった経験（現実）法則と、共通の事実を超えて可能な状況についてもいう反事実（反同一）条件言明（文）と仮定法的条件言明（文）⁴が成立可能な普遍量化文（全数調査ができない全称命題）である理論（基本）法則がある。

本論は、社会的存在を扱うにもそれが自然的存在でもあることを分離せず、上述の自然的存在論にある①のシステム階層にある連続面を「系統」——以下で用いるときはこの意——という。それでも、自然科学と社会科学の断続面⁵は、その捉え方に変化はあるが残る。現実や「基盤」諸理論から発する問題意識は、これまでも本論各稿の初節が示したように蓄積されている。ゆえに、ヒトを「系統的存在」とする論文は、さらに書かかれて、これからこそ増えることになるだろう。また、余すことのない＜全＞包括未満の「全」包括というにおいても、つぎのデマケーション問題がある。①要素還元主義では説明しきれない関係性がある秩序の階層性を認める科学がいささかも否定していない至極あたりまえなホーリズム、②その推論の妥当性がどの立場の者からしても較差があり過ぎ伺い知れぬ神秘的な（そうなる）ホーリズム——しぶとく放棄されないもの、そもそも反証不可能なもの。この点では進化論も、そうといわれたがどうとなるのか——。

それでも、つぎをみるようにする説明は、まがりなりにも分厚く色濃くなる。①社会的存在としてのヒトについての記述、②系統内にある対象（後述での項や群）の構成——これには、アルゴリズム⁶により実行可能なconstructivismと、ヒューリスティックス⁷により実行可能なconstructionismの相互作用がある——、③環境、④内部-外部構造——「構造は内部にも外部にもない」というのは物的実体ではないという意——。ただし、以上をこなすには、逆もいえるが、社会科学における自然科学の還元的応用（濫用の排除⁸）と、社会科学の自然科学からの創発的自律の両立が必要になる。地上の社会に下りて向かうようになった物理学は、東洋的思考法が大きく貢献した時点で社

会科学化した自然科学といえる量子論を経ているが、質を量で説明し尽くすまでは社会科学がなくなるならない。

系統における進化という事象（量と性質が決める事項の状態すなわち事態の順序対）をフォローアップすれば、既述の自然的存在論の②や③や④にかかわる難解で手強い記述も充棟し、汗牛に思しい。そこからのわれわれに、他のものに比べかなり親和的であるのは、つぎの集まりであるところの科学实在論の認識論⁹である。①批判的实在論という認識論的实在論、②認識論的進化主義を携えた認識論的自然主義を前提とする認識論的構成主義、③ある種の構造が保持される理由を提起した半实在論と理論の新しい意味論的捉え方である構成的实在論がつながれた構成的半实在論、④合理経験主義（「理論信頼-感覚懐疑」／「理論懐疑-感覚信頼」により、認識を実践の現場で捉えようとするプラグマティズム）、そして⑤「正当／正統化」における「可謬的事実主義-可疑の本質主義」。非様（後述する科学方法論上でならば、非反証主義の反様、反証主義の別様）があっというとするが、これまでに限るという限りを尽くしてアブダクション（創造的想像力による仮説形成）¹⁰になる。その敵は、「理論／実践」上のなめらかに開かれていく組織社会関係において、複雑な問題に開かれた新たな発見がある理解と解決に至りきる、「自律-他律」／「批判-擁護」／「信頼¹¹-裏切り」を終ぞ忘れぬコミットメント（確約）のなさである。

系統にある諸階層（レベル、タクソン）の既知——解釈における「差約-差延¹²」（「能記間の置換による所記間の差異の差分縮小」-「微分的再生産・無限後退」）を孕む——の系（本論では意味的には系とシステムを使い分けない）が n 個であるとすれば、論理上で答えは出揃って（拡張カテゴリで 2^{2n} ）¹³も、 $\sum_n C_k$ の k の値が、われわれによる能記化と再概念化された所記を異にする対象「カテゴライズ」（古くは物かその性質の区分、それを拡張した上での区分の区分）の数を決める。完全分離（ $k=1$ のとき）と完全未分離（ $k=n$ のとき）を両極とし、そもそも両極間の分離／未分離にかかわる k の値（ $2 \leq k \leq n-1$ ）が、諸論者間でどうしても合意には達しない（同一に

はならなかった)。上記のように考えれば、先行研究のうちの下記の2系列を両肩（表頭と表側）としても、他のすべての異説が消去・排去されるわけではないという意味で、メチル化する異説があるということである。このようにいうのは、固定化された対象カテゴリは訝く、絶対懐疑と絶対真理のあいだの一般妥当性に向かい選択的に、懐疑・思弁、実験あるいは観察され、未知の系が加わればなおさらに、後世代には他のカテゴリイズの方がよくなりさえするからである。ただし、個と集合というかたちで形式的に定義されたカテゴリを帰納的に利用する西洋的思考法と、部分と全体というかたちで「家族的類似性¹⁴」の関係性を重視する東洋的思考法の比較研究¹⁵があり、これをも本論は重視する。むしろカテゴリの中の規約ではない、後述するパラダイム（後に「専門母型」）の中の規約——パラダイムは求め得る規約に優先して「パズル解き」といわれたゲームを規定できる——は、家族的類似性と同じことである¹⁶。

交差系の文脈に引き寄せ縮約したカテゴリは、「経済系-生態系」¹⁷／「情報系-資源系」¹⁸における2系列4系（ $n = 4$ ）である。情報系（ \square 構成されたシンボル体系としての認識システム・考系）は資源系（物質的な存在システム \square 生系）の法則にも従う必要があるが、情報系に固有の法則を明らかにして「自然と文化（経験、権力）」を貫く秩序のあり方に関心を払う必要もあるとして、情報系を資源系に還元する機能論だけでなく、現象を資源系には還元しない情報系構成論である構造論も要請されるだろうといわれていた。本論では、ここでのカテゴリがより持続可能な系であるには、それとなく提起されていたことがより見えるようになっていう系統を貫く秩序・コスモスのあり方に関心を払う。しかしながら、経済的情報系を生態的資源系に還元しなおかつ生態的情報系を経済的資源系に還元するという意味からも洗練された機能論になっていることに比べ、思考順序を残しつつも構造論と現象論を相互に組み入れてきている考系はいかんせん未だ生系と乖離がある。

前者の機能論は、すでに社会科学内においてバナキュラー・リストを探究するかたちで自律応用されている諸ケイパビリティ接近と接続する。後者の構造-現象論では、「心脳-身体」／「主観-客観」

における対角2系からなる2つのクラスの「一致／不一致」というしばしば無差別になっている大前提の違いを改めて考えることになる。「一致する」と対称化する場合に「構成する」といい、「一致しない」と非対称化する場合に「構成される」という傍点のようないい方に、両者の違いが際立つ。いずれにせよ、「心脳-身体」の意識、「主観-客観」／「合理-経験」は、強化可能としても残余の失せない制限性がある。「心脳-身体」／「主観-客観」の「対称化-非対称化」を踏まえたシステム論は、正当化された真なる信念という古典認識論（内在主義的個人主義）による学習モデルが媒介となるようなシステム論ではなくなる。

選択やその事前事後評価——その方法は心・意識¹⁹のレベルの変化に左右される——は、合理経験的に相補性を踏まえるならば、「事実／本質」寄りの科学と、「特定共同体寄りではない社会寄り倫理／個人寄り道徳」——ギリシャとラテンの語源に遡ればこういういい方ができる²⁰——に基づく。「経済系-生態系」／「情報系-資源系」においても、選択やその事前事後の評価には、つぎの2つの途がある²¹。①既存科学権威の営為と手を携えようとして共同体倫理の社会的倫理への格上げのために啓蒙する途、②持続可能性を目指しシステム自体の再定義や再編成に向かいつつ道徳的開明を希求する途。

本論は、上記②の途上にある。ただし、「全」包括系統[論]へさえも侵入しかねない「可能（ \square ケイパビリティ）の持続化」への脅威をくいとどめ、「もうひとつ」（alternative）寄り解決と向き合うには「快樂-幸福論」も踏まえあらゆる方法論を駆使し、一般妥当性を高めることに絶えず進む「いまひとつ」寄り解決としての²²、いうなれば「可能持続性論」である。これは、つぎのようなシステムの構造だけを、論究して済むものではない。あたりまえだが、ランダムなものはシステムではない。現実のシステムには、ともかくも「意図／非意図」のストック（「資源／情報」のレパトリ、不確実性プール、「前進／後進」的な中立選択子・ドリフター）が複数ある。そして、1つか複数のフローを調整する中で、あるフローは、ある意図されたストックを満たし、他の意図されたストックを変化させる「正-負」／「線形-

非線形」のフィードバックをかけている。これらのフィードバック間にある「パワー-テンション（コンフリクト）」の関係にも、「対称-非対称」／「潜在-顕在」に「破れ／庇い」がある。ゆえに、このような構造のものであるシステムは、「安定-不安定」／「均衡-非均衡」／「コスモス-カオス」の連比があるかのような挙動をみせる。

「宣揚による相対化-不自然な分散化」がある各項の杜撰さは、紛れもなく相互を強め合う。このことの放置された多元化と、自然な相対化による多元化——これには普遍性がある——の混同は、組織〔論〕化上の問題である。よって、カオスの振子にフラクタルがあるという自然科学の複雑系理論を再現するように、一見して制御しにくいカオス（複数の文脈性が生じたランダム）の中に制御しやすくなる鍵が潜むことを理論化しようとする社会科学における応用がある。ここには、複雑でとても理解しがたいとされてきた〔社会〕進化システムであっても、フラクタル幾何学のコッホ雪片のように、つきつめれば組織のシンプル・ルール積み重ねから生じている場合もあるはずだという組織複雑系についての見込みが働いている。そして、選択についての調査結果²³の対象レベルを上げて考えるだけでも、現実に進行拡大してきた資源系に至る統合の逆作用に対し、既存の資源系に対する新たな資源系の発生数がある倍率に達するとカオスが影響しだすということの説明がつく。交変系であるならばこそ、その情報系にとって、ランダムな資源系はむしろ制御しやすい。交変系での資源系のカオスがその情報系を混乱させるようになれば、その情報系はその資源系の「法則」に従うようになる。換言すれば、考系が先に「完全-不完全」の区分が企業グループ化によって効かない競争と化すほどにおいて、生系の明示（公式）的な前面化に伴う考系の非明示（非公式）的な背面化という現れが、顕著になるということである。そうした明示・非明示化の機会主義的消耗化を避ける共時的必要からの規約は、通時的に可能持続性を担保するほどいい。

ただし、その正当性の根拠がどこにあるかとなれば、正当化根拠はこれを意識にのぼらせられる——のぼってくるとは異なる——主知（知識の内

行動の関数の変数は環境にある²⁴とする外在主義的な決定論の強い解釈は科学的知識とはいえない。近年の心理学研究ならずとも、内在主義や外在主義は弱く解釈されるようになってきている。そして、より強い信念である確信（すべからしき認識）を抱く個人および集合体とその外部とのあいだの〔コミットメントがある〕事実としての信頼（現状からの当然）に足るつながりを重視する「知識の関係主義」が支持を集めている。この意味で、知識や社会交変換の主体は、人間による観察可能性からインターネット・オブ・シングス（IoT）にまで拡張された可能的科学検出性下の個人単位でも集合体単位でもないがラディカルな決定論でもないパースペクティブ（観点）のハイブリッド・システムである。よって、信頼がおけなくなるまでに〔不自然に〕「絶対化／相対化」したものを前にして、それらを余すことなく諸関係の中に位置づける発見的解決の「存在-認識」論が、「全」包括系統論の目指すところである。予断するが、これは、入れ子をイメージするだけのものではない。

認知依存がある関係的な正当性は、根拠として組織的に擁護される。その「強制」に従える確実な法則下で同一性の安定をめぐる諸規約を変換する取り計いは、審級として擁護される。「自由-責任」／「権利-義務」における最も強い強制の在処である「責任-義務」が減るか蔑になるのは、既述のようなシステム構造にかかわる意思決定問題と組織においてこそある「共有地悲劇²⁵」という原理問題の区別への無関心ないし無視や、「意思決定の場（機関）／その構成者」へのフィードバック・システムの設計が不適正だからである。ただし、組織（機関）を設計するための「規約」（終局は解釈の規約）に循環がある場合、循環自体はあってもいいが、これが妥当性を立証しようとして使われることは、許容できない悪循環化に他ならない。このようになることを除けば、認知リソースの制約（「人間-装置」の制限合理性）を受けた根拠と審級は、擁護できないという理由もないが批判を免れえるという保証もどこにコスモスもない。よって、根拠と審級は、「内在-外在」／個〔人〕-集合体において、結局は、「重みづけ」上のテンション関係の解消対応を営む（実践する）。

その重みづけには、「安定-不安定」／「均衡-非均衡」／「コスモス-カオス」の連比と、「実在-非実在」の後述する2次化Iにおける4系の順位変動の「固定化」がある。それは、そもそも、誰もがネットワーク・ノードとして、ホロンであるかクリナメンであるかプラトーであるのか。このことに実のところ決め手なく腕き蠢くものであるからと考える。そこで、前稿²⁶におけるメタスタビリティやカオスモスゆえのダイナミクスにかかわる言及には、つぎの補足を要する。「 $n-1$ で書く²⁷」というの、そこでの謂いではプラトー（他の多様体と連結しうる多様体）であるリゾーム状システムにおけるノードの現出をもって「 n （多）-1」が書ける、というものである。このプラトーは、他のホロンやクリナメンと連結しうる第3項としての自由変更体と解せる。というのは、プラトーが同一性の「投機／延期」（差異性への「延期／投機」）の可能態をコードし、なおかつ「 n （多）-1」には転換性があるとする理解は、相対主義の存在-認識論とは一線を画しているからである。

ヒトの「社会的存在」としての本質については、本論の道標となるつぎの6つの置き所がある。①合理的客観によって利益・効用の極大化を目指す功利的存在、②非合理的主観——これを客観化してみせる学がある——による選好に基づき売り手の効用サービスを選択する市場行為者的存在、③市場行為者の「見せかけ／見かけ」の内実がある心身的存在、④上記③の伝統的な内在主義的発生論を包摂した相互作用の構築存在、⑤「法によりみずからを律し」相互有利性のために契約を交わす協働的存在（長期反復的關係において協力解がナッシュ均衡解になりやすくなる存在）、そして⑥得られる相互有利性はなにもないが相互承認し「進展を考えず」交際する協働的存在。よくよく知られたこれらの大説は、忠実、丹念にレビューされてきている。ただし、これらといっても、いずれかの見解を思い込めば、誰も未来には戻れない。

そして本論は、ホロン、クリナメン、プラトーという項が上述の諸本質とにおいて包み披く「生の本質」に近い底といえることを社会科学問題とし、以下をテスト命題が演繹される仮説とする。①マクロの交変換群には、入れ子状システム、多

元関係体状システム、そしてリゾーム状システムにおける特定交変換の連立がある。②ミクロの交変換項には、それらの特定交変換におけるホロン、クリナメン、そしてプラトーという状態の重合／収縮（状況依存的にいずれかの状態を最前面化するディスプレイポジション）がある²⁸。③上記②のメカニズムとして、パワーを「籠めた／抜いた」作用と、「意味-非意味」／「接続-切断」がある。そして④規約をつくる情報系ゲームとその規約下の資源系ゲームが対称（非対称化）するほど、われわれの選択はより自由（強制）度が高くなり、「諸本質／諸事実」（「両」ゲームを実践しつつ内部観察記述した「構造-現象」の解釈／「両」ゲームの実践を外部観察記述した「構造-現象」の解釈）が、共通了解の成立する領域で確信として拡大する。

以上、どのような存在論と認識論をいかにどのに認めるかによって、マーケティング研究は異なる方向に導かれる。このとき、誤った方向に導かれたり、解決できない「疑似」問題を抱えることもあるため、ここがすでにマーケティング論においても問題の鉱脈である。また、社会[志向]、生態、共棲（共生）についての全体論か原子論かにかかわるシステム論にとって、個物、種、過程、階層を考察していけば「全」包括系統における探究となり、1元論か多元論か、そしてこれらに対する包み披き論かを惹起する。そして、この探究をマーケティング論としておこなうときの、主として市場経済における変換（変異、進化の第2総合以降の変異を含む広義の変形）と交換のカテゴリおよびパラダイム（家族的類似性）の拘束性と可塑性、ヒトの社会的な諸本質のいずれかとして披くがそれらを包んでいる生の本質という、取引当事者についてもいえる前提理解を示した。

2 方法論

探究成功の原理が考えられてきた。デマケーション問題（スペクトル、スペクトル逆転）と解釈の強弱ということがあるものの、経験に基づかない科学と基づく科学という区分がある。後者の科学にとっては、形式論理学だけでは不十分であるといわれてきた。このことは、マーケティング論についても、むろんいえないことではない。

学問分野の境界の、堅牢／侵犯化にかかわり、厳密性標準が上下するという楽観／悲観論がある。その論議は、自然科学と社会科学での内的間的なたとえ相互濫用といわれる事態についても、分野間での、「非」独立、「非」排除、「非」両立を考え対話して本物になる。たとえていえば反物理主義と生粋物理主義のあいだに、諸学の自律領域があって諸学があるという意味で、「反」や「生粋」に頑迷であってはならない。そして、諸学の自律領域において、互いに両立しえない2つの理論をともに正しいとすることがあってはならない、といわれることを考えるのである。「部分(個)-全体(集合)」／「下位-上位」のどこにも関係の中に自律領域もあって、そのどこもある。こういうことが、どこの誰によるかという以前にある誰にもよらない統治の可能持続性である。その実際の営為に利用可能な具体的方法の派生は否応なく必要であるが、その基本にあるのが方法の方法である。その方法の方法であるn項の対立／対比の諸操作は、なにの「部分-全体」／「下位-上位」かによらず、相互作用対応の前提である。これらが、「可謬的事実-可疑的本質」という脳内領野間の相互負荷性のうちでわれわれが手にした(する)現象の汲み方と認識の接続の仕方を、案内(誘導)する。

対象・項の一部は実体項または関係項として取り扱えるが、その全体をそっくりと実体項または関係項として措定できない項もある。よって、実体項と関係項という区分について、別々の現象を表すとする前世界の住人、別々の現象を表すわけではないとする後世界の住人がいる。ゆえに、哲学(「实在論-観念論」／「唯名論-実念論」の渦中)や自然科学(「これでいいはず-そうはいかない」／「単純系論-複雑系論」)に還元できない社会科学の創発的自律については、科学方法論に影響を及ぼす科学实在論を踏まえて考える。

両項を強引に宙づりにする2元化に代わろうとする円環化も、その2元化ないしn元化を相互規定・相互浸透的な中間項により超克しようとする見かけの3元化なども、それらは変容1元化である。また、一方だけでは本質的理由を説明できない現象問題を解決するために媒介項を設けテンション関係にある2項を温存する2層化²⁹に対し、

ある項とその欠性対立項およびあらゆる他の対比項との関数としてある項そのものをセット(単位)化する脱構築³⁰は、後述する即非論理と通底する。よって、脱構築は、2次化(ダブル・クロス)にある非形式論理クラス・カテゴリ交差の内実をひきだす操作として含有される。また、2次化する項が、内的には変容1元的であることはある。そして、「2次化I」(2項の2次化)や「2次化II」(3項のうちの2項ずつの2次化)から、「2次化III」(チャンクの限界内での多項のうちの2項ずつの2次化)に向かう場合がある。

2項の2次化(図1)には、網掛けのない形式論理クラス(「科学的方法」の標準論理系)と網掛けがある非形式論理クラスがある。たとえば方法論的個人主義³¹と方法論的集合体主義という2項の2次化における、形式論理クラスでの形式論理バイアス(強制的に作用する偏向癖³²)の相克という堂々巡りに対し、非形式論理クラスを考えるうちに実体主義(個人主義と集合体主義のセット)に対し関係主義がでて論理階型³³を上げた。そしてすでに、実体[主義]と関係[主義]という2項の2次化における非形式論理クラスが、考えられるところまではきている。これと、既述の中間項の性質としていう相互浸透との混同は避ける必要がある。2次化のさまざまな2項は、三枝弁証法でいう正と反という言葉では代表されきれない。しかしながら、2次化は、逢着した物理学者を擁護するように科学实在論が経験法則化する包み披き論になる。

2項(ダイアド)と3項(トライアド)のいずれが基本単位かという論争について、その後に終結させたかものはあったが、均衡または安定系での共時分析において有効な2元化と、変動系での通時分析において有効な3元化という捉え方があった³⁴。戦略論における事業の定義法としては、その実践的な遣い勝手は遣い手によるが、共時分析での2項にある共通項を取り出し3項にする3次元モデルが周知であり³⁵、こちらの方が通時化するには遣いやすい。このことからいっても、共時分析では2次化Iが、通時分析では2次化IIが、操作上より適するときがある。よって、2次化Iや2次化IIによ

図1 2次化

	A	B
A		
B		

る記述箇所が他論より多いとみなされれば、それは本論の特徴といわれるであろう。それというのも、それらの2次化が、「多なる多」にいたる多元化との違いを「全」包括系統論が担保する〔無意識にもある〕関係主義の方法論はどうであるのか、ということへのいまあるひとつの解だからである。

<持続可能性>は、むしろ先送りと前倒しのあいだにある共時態——戦略、政策の経験面の「科学」は、「有効性・効果性」と「効率性⇨労働集約的な能率性」へ、実用論的に直走る——の通時分析に基づく<有効性>と<効率性>である。「科学」は「不変-可変」／「実体-関係」における関係（構造）の時間の中に「ある／ない」根拠を追究し<科学>に向かう。学問は、「哲学-科学」の2次化Iにおける非形式論理クラスにある。その学問には、理論と実践のこれが実学であるといわれる循環（その中で一時融合）、主観には言及せずひたすら客観化に向かう行動論と主観への言及を含み続ける行為論があり、これらが投入されたSAPのようないわばas論は、2次化Iにある非形式論理クラスを追究している。

その一方で、「[非] 実在」は、特定状況下で解釈された観察対象である。その解釈は、たとえ専門理論に基づくものであっても、ある時点である集合体内の誰も疑問に付さない禁則処理後の加勢された解釈である。仮説として「科学」を受け入れることが「合理性」であるから、それは決まって制限されている。よって、観察対象についての、社会学者が重要であるからこそ引き摺り押し潰されずに定義しておきたがる語群³⁶の事象についてこそ、<…>と「…」の混同を避け、「経験十全³⁷」（理論が記述する構造への観察可能な現象のすべての埋め込み）というのを慎む。あるものである言語ゲームにある、文においてある語の³⁸、そうであるならば、言説においてある文の、パラダイムにおいてある言説の、そして「異常化／特殊化」においてある通常パラダイムの、という「分析-総合」のデマケーションにも、包み抜き原理があてがえる。

統語・構文論（シンタクス）的には、したがっているが従っていると思っておらず誰も取り出せていない規約（たとえば連濁）が言語化されない

暗黙知³⁹として根深くある一方で、意味論（セマンティクス）的にはつぎのことが避けえない。すべての言葉・言語は、コード化（能記-能記に籠める所記、最終的な所記はない）であり、概念化（外延-外延から籠る内包、最終的な内包はない）である。よって、すべての者たちにとり、コード化が概念化（所記と内包の共訳化による照合の普遍化）するまでの間や、概念化がコード化（内包と所記の規約化による照合の文脈依存化）するまでの間に、言葉と意味の照合上で共通理解をみだしていない、共通理解が挿入されていない、共通理解からの解放（「コード／概念」の書き込み権がなくなっているといったニヒリズム）に至るといった、「浮遊」（フロート）⁴⁰がつきまとう。しかるにひとまずの捉え方を度々に示す必要はあるが、「なにになにとは何か」への厳密な答えは出発点ではなく到達点である、といわれる。

たとえば、学修度を点数化するように、操作的定義が有効に活用されることはある。しかし、このように観察不可能なものを指す言葉を観察可能なものを指す言葉に置換することが、いつでもはうまくいかない。また、だまし絵をみて、「～の絵である」と人により言い方が変わる、あるいは一気にその全体の見え方が変わるということがある⁴¹。となつて、自由にゲシュタルト（英語ではコンフィギュレーション）置換しているときには、「観察が可能-不可能なもの」／「それらを指示-表示する言葉」にある区分上の、絵（観察対象）と言葉の区別さえもがもはやなくなっている。このようなことは、「観察-理論-文脈（⇨状況）」の間での相互負荷性（データセットのズレによる比較不可能性）を問うようになるので、上述の浮遊問題をあくまで言語問題に由来の共訳不可能性として解こうとする説明には荷が重い。そして、それはそうだとにしても、科学は観察可能なものについての理論を経験十全に構築することに関知するのみであるといわれることに対しては、次節の前半で述べる。

汲み言い尽くせぬこと——マクロかミクロか、個人や集合体の「主知／主意論」か決定論か、情報や資源の分配か再分配か、なにが合理的行動か合理的行動の帰結はいかに、対内か対外か、など——に、「案の審議制定機能-制定されたこと

の適用裁定機能-それら以外の作用機能」という区分が入る。ここに、コスモスの「形成-解体」の追究が領域化され、統治系の諸学がある。その諸学間で、1970年代から続く論争があり、その核にはつぎがある。①「正義なき善」対「善なき正義」、②「善のための正義」対「正義のための善」、そして③これらの交錯。これによって、日本史からあらたな今後像を描く嚮導原理が決まってきた（くる）といえる。

以来少なくとも、個人の善(正義)と社会の善(正義)の無条件一致ではなく、個人と社会の相互作用を考慮した善(正義)のあり方に向かい議論は成熟してきている。よって善や正義は、状況依存的にいくつかの進化的安定戦略(ESS)として説明されてもいる⁴²。ただし、正義(善)は状況により規定された善(正義)の実行手段であるといういい方にすら分かれ、やはり浮遊感がある。むしろ、ありとあらゆるところから浮遊が未来永劫にわたり解消する、ということはない。それでも、その者たちの「**花**」——この×は、汲み言い尽くしえていないという意味で用いられている⁴³——ともいえる「コード/概念」化の断章(分離・分節)が、短期の問題解決にも資するものでありながら長期における具体的な誘導を果たすと感じられるようになれば、それはすなわち本稿冒頭に書いた連関構成のもとになる。そして、このことは、ある者たちを、より、短く(長く)、軽く(重く)、シグナル(シンボル)として、そして実践-理論的に、縛る。このようにどうでもあれ、この縛りは、以下のような理論選択ないし理論構築のための科学方法論の自覚または無自覚による。

実験や観察から理論や法則をつくる科学方法論には、仮説を立てるか立てないかの論争とその後の論争がある。「仮説演繹/[枚举的]帰納」は、前提(仮説/無心に観察し繰り返されているとする同種の事実)に、「ある/ない」情報を、引き出し/付け加え、導出した予測を検証(確証)または反証し、それを結論とする。仮説演繹も正当化文脈では帰納である。いずれも、観察との一致により予測の確からしさが増す(コラボレートされた)とする点では同じであり、徐々に確からしくなる前提が理論であるということになる。ただし、枚举的帰納は、厳密な帰納とはいわれるが、

実験や観察で、みえていない、みえてもわからない、みることができない、というものまでを含む無限集合の構造パターンについての言明を組み立てえない。また、チューリングマシンの停止問題と同じことだが、経験法則化している斉一性原理と帰納主義の循環的正当化の妥当性に対する懐疑⁴⁴が、払拭しがたくあるように思われてきた。しかし、「経験法則-理論法則」の2次化Iから、斉一性原理は経験的だが理論寄りではなく、包み披き原理は理論的だが経験寄りではないと対照化できる。これを道具立てとして擁護するかしないかであり、擁護するならば、経験知と理論知のバイアスをバランスさせるかどうかになる。

批判的合理主義である反証主義⁴⁵は、予測と観察が一致しても仮説が検証されたとはいえないとするので、検証についての考え方は異なっているが、反証についての考え方は仮説演繹と同じである。そこで、反証をかいぐってきている仮説が理論(価値)であるといういい方になる。反証主義は、予測と観察の一致よりもむしろ不一致を重視し、仮説がスクラップアンドビルドされ科学は前進するとする。よって、科学と疑似科学のデマケーション問題にもかかわるが、反証可能な仮説を科学という。ただし、反証可能性という概念は、仮説の内容だけでなく、不利な証拠の無視など支持者の態度までが考慮されるようになった。予測をするには、仮説と初期条件(信憑の2項)だけでなく補助仮説群が必要(信憑の3項へ)であり、補助仮説群に変更を加えること(アドホック変更)で演繹が成り立っていることはよくある。このことで、仮説演繹にもまつわるが反証主義に対して、理論の観察負荷性の否定につながるが、仮説の観察非決定性をいう決定(限定)不全性・過小決定問題⁴⁶と呼ばれる論難がある。

これには初めに、アドホックに仮説が救われ続けても、むやみやたらな辻褃合わせはされないだろうとして、科学の合理性批判には至らない穏健な弱い解釈があった⁴⁷。そこへその後、いかなる仮説も信念ネットワーク——区別が立てられないとする先の3項や論理法則そして日常の信念などのあらゆるものからなる——の結節点に過ぎないとし、「すべての仮説がすべての観察から支持される」という最も過激な強い解釈がなされ⁴⁸、

デュエム-クワインテーゼ（知のホーリズム）と呼ばれるようになった。たとえば、ウェザー・マーケティング論は、天候以外を初期条件とするマーケティング仮説を、天候に関する補助仮説で救おうとしたものである。ところが、先の強い解釈では、その仮説が、初期条件(値)鋭敏性——均衡・平衡に戻す負のフィードバック現象に対する「風が吹けば桶屋が儲かる」というバタフライ効果の類の正のフィードバック現象——どころかそれを救おうと加えた補助仮説のそこにも鋭敏性があり身も蓋もなくなるようではあるが、そうはならないといっている等しい。こうしたように、そして、仮説の反証が原理的に不可能であるかないかの論争になったのであるが、補助仮説禁止ルールによる決定不全性問題への撥ねつけは考えられた。

論理実証主義ないし論理経験主義は、特殊・旧理論は一般・新理論に統合され説明される（より基本的な概念や法則に発展的に解消する）という還元主義に代表される。ところが、進化の連続説か断続説かを彷彿させるように、ここに重たくある反証主義や科学についての直線・蓄積・漸進的進歩観の根底に、観察の理論負荷性⁴⁹と共認不可能性をもって切り込んだパラダイム論⁵⁰が、それらを大きく揺るがす衝撃を与えた。すでに反証されていること（既存理論・通常科学上で、その規約に従わない、その規約でうまく説明できないもの、すなわちアノマリー）を蒸し返し徐々に解決し、科学者集団・共同信憑体をつくりあげ受容されていくものが、妥当の新解釈となるよいパラダイムである。パラダイム転換は、さながらゲシュタルト置換のように前面（背面）化していたものから背面（前面）化するものがあるというようなデータセットのノイズ処理として、その置換上で解くに値する問題をつくり変える。しかしながら、新旧パラダイム間での選択・最適者生存も、不利な証拠のアドホック変更処理がからみつくと、決着はつかない。よって、パラダイム論は、そうした断続-相対の中での飛躍という理論選択の不合理性をいうものと受け止められた。この批判に対しては、仮説演繹の規約⁵¹ほど明確ではないが、理論選択はつぎの5基準により合理化できるとされた。①実験や観察との一致、②内部無矛盾性と他理論との整合性、③応用範囲の広さ、④

説明に役立たない要素を含まない単純性、⑤新しい側面や予測につながる豊饒性。それでもパラダイム論に対する合理主義からの批判は治まらず、かえって相対主義からの批判も受けることになった。相対主義的批判にも諸論からのものがある。そのひとつに、つぎの1つ以上をいうとされる社会構築主義⁵²があるが、これは社会決定論的相対論的な観念論である。①自明の知識への批判的スタンス、②世界理解の歴史および文化的特殊性、③社会過程および社会的相互作用の所産としての知識、④協議された理解と社会的行為の相補性。

合理主義的批判には、まず、リサーチプログラム論（洗練された方法論的反証主義）⁵³がある。パラダイムに類似のリサーチプログラムを、世界観や方法論に類似の不変な堅い核と、初期条件や補助仮説群に類似の防御帯から構成されるとみなす。そして、決定不全性を踏まえ、防御帯のアドホック変更が新奇な予言につながるかつながらないか（前者を前進的プログラム、後者を後進的プログラムという）という基準によって、理論選択基準はより合理的になるとした。これには、合理的基準としてはかなり盤石であり、共認不可能性問題もある程度は回避できるという評価があった。ただし、パラダイム転換論以降の到達点といわれることがあるものに、リサーチトラディション論⁵⁴がある。これは、新規な予言は理論選択の1要因であり、実は特定が困難な堅い核を置いたことのドグマ性に対し、理論選択の基準として、旧理論でまだ説明できないことを説明しようとする通常の営み（パズル解き）に類似の問題解決という実用的観点を取り入れた。同じ伝統内でも、堅い核のように科学者の見解が完全に一致しているわけではなく、理論と観察の調和、理論の対内対外の調和という問題解決・理論更新があれば、伝統は進歩するとする。よって、新規な予言は問題解決能力の十分条件だが必要条件ではなく、問題解決能力が増大していれば新奇な予言は不要であるという。なお、「経験法則-理論法則」／「実在主義-反実在主義」における相違が、科学方法論論争においてもある⁵⁵。

そして、補助仮説によって理論が救われるか否かはオールオアナッシングではなく程度問題であるとする。すべては、新しい解決（理論）の発

生が叙述されたように⁵⁶、「暫定の信憑」である。理論が暫定の信憑であるということは、程度について考えると取り扱いやすくなる。統計的頻度(客観確率)に基づくだけでなく、信念の度合(主観確率)を考えるベイズ主義は、帰納主義の再生に貢献したことから、科学方法論を拡張するともいわれた。

むしろ科学は方法論のみで発展するものではない。しかしながら、どのような科学観であるかが、方法の方法や科学方法論の総合判断によるものである以上、上記を踏まえ、本論も展開される。

3 科学観と接近

たとえば、決定論と非決定論の多重性が厳然としてあり、共時的にはどのレベルまでで止めるかにより、広義決定論になるか広義非決定論になる。公理化接近と非公理化接近についても、同様にして、広義公理化接近になるか広義非公理化接近になるかという、つぎの話である。

「科学の構造(仮説演繹的公理系とその反証・反駁、非公理系)-科学にとっての「観察可能/不可能」な現象-科学の理論による解釈(見たいものしか見えないという観察の理論負荷性、見つもりのないものが見えたことによる理論の観察負荷性)」における科学化は、実践的習得の場(フィールド)での理解を超えて、他律/他首的な非対称的因果関係にとどまらない過程(「還元・線形-創発・非線形」/「フィードバック-フィードフォワード」)を対象とし、説明を体系化する。諸科学におよぶと理解されている周知の科学的説明には、つぎのものがある。①被覆法則⁵⁷、②因果メカニズム⁵⁸、③理論的同一性⁵⁹、そして④統合化⁶⁰。このような科学化には、<普遍で統一的な体系>しかないとするれば、<科学>において特殊科学化するその体系は、このときはじめて科学であったとなる。

掃いて捨てるほどあるどうでもいい事実のような「事実のままの事実」、現実の経済がその均衡状態になったことがない戦略ゲーム論が置き所とした数学的には洗練された均衡のように「本質のままの本質」がある⁶¹。客観(確証可能な間主観)化されても、事実が本質とは限らず、本質が事実

になるとも限らない。しかも間主観には、いまのところ疑いえないという意味で妥当な関係公約数の主観と、現象学でいう他者主観論がある⁶²。他者主観論は、他者こそが、聞き手である当の他者に話している私が構築される場であることを、つまりは私があるなかで生きていることをいう。その一方で、知的節約でもある経験則へと置き換えられた経験された具体的事実や、抽象(一般化、共通項の抽出)によって縮約した少数の原理(テスト命題演繹仮説)へと置き換えられたさまざまな具体的事実のような「本質になる事実」、経験則をさらに理論に縮約し、その原理から引き出された帰結(テスト命題)が実在的性質を対象とする判断への翻訳(モデル)となり、経験則と照合されたというように「事実になる本質」がある。そして、「文脈・特定状況」-「相互照合がない」という意味で説明のつかない『事実/本質』-「理論」は、それぞれに「暴き/救い」あう3項関係になっている。理論化、これにはこれによって説明が付き実際にあてはまる「事実-本質」がなければならないが、あきらかに未来永劫の誤りとなったもの以外は排除すべき無駄としないことが、最低限に重要である。

不完全性定理⁶³が、たとえ帰納を排除し切ったとしてもある演繹体系の限界を示した。一方で、射影(投射)可能⁶⁴な述語がありこれは帰納できるが、すべての述語について射影可能不可能の区分は可能かというように、既述の帰納への懐疑に応えうる帰納の正当化問題も解決してはいない。新しい理論や法則の発見の文脈では、論理的に妥当な推論(狭義の枚举的帰納法と演繹法を組み合わせた仮説演繹法)に基づくだけでなく、方法の方法の操作や、形式論理アルゴリズムに還元できないがすでに有効性の指摘されている非形式的推論(セレンディピティ⁶⁵の発現背景としての、アブダクション、メタファー⁶⁶やアナロジー⁶⁷)が広義帰納としておこなわれ、自然科学でも公理化接近・仮説演繹的体系化だけが支持されることは減っている。

往時、つぎの「モデル」概念が提起されている⁶⁸。それは、オリジナルにはない性質がある否定的アナロジー(類比上の異質項)を捨て、オリジナルにもある性質がある肯定的アナロジー(類比上の

同質項)を取り、それらのいずれでもない、それがわからない性質がある中立的アナロジー(類比上の未定項)を加え、「その集合」の全体を解釈した、現実の「不完全コピー」というものである。不完全コピーであることを厭わないのは、肯定的アナロジーに頼りきっても所詮は部分的ではない完全コピーに加え、中立的アナロジーにも頼れば、理論をより一層と成長する過程におくように扱えるからであるとした。むろん、科学がアナロジーやメタファーだけの束だと、いったわけではない。肯定的アナロジーですら、否定的アナロジーや中立的アナロジーに見直されることがある。逆に、中立選択な浮動(ドリフト)もそうであったが、否定的アナロジーから中立的アナロジー——いずれにせよ公理化接近では捨てられ続ける——そして肯定的アナロジーに見直されることがある。原理として固定されている「節減化」からすれば、現象の解釈も最小解釈に向うが、それに前後して、既述の「その集合」に構造が入れられようとする。どちらがその場限りではない最小解釈であることになるのかというならば、肯定的アナロジーだけに頼る公理化接近のモデルの解釈は近似的に成功し、非公理化接近といえる「モデル」の解釈は類似的に成功する、というのが公平なところになる。

前稿で述べたシミュラクル・シミュラクルにきたしている、つぎの区分⁶⁹があった。①オリジナルのレプリカやイミテーション(プレモダン)、②オリジナルの完全コピー(モダン)、③オリジナルのないコピー(ポストモダン)。「オリジナルのないコピー」と表現された経験は、オリジナルとコピーの類比がどこまで及んでいるのかわからない相互作用的メタファー⁷⁰による現象の経験である。A(被説明項にある[日常の現実言語による]言明)がB(説明項の[類似の一般言語による]言明)で述べ直されるとき、AはA'(Aに近似的または類似的に等価な言明)である。このとき、BからAは演繹できないがA'が演繹できれば、A'はAのメタファーになっている。それでも、A'がAより受容されやすいならば、Bは受容される。このように、相互作用メタファーは、オリジナルの代置メタファー⁷¹にはないような、たとえられる方だけでなく、たとえる方についてのわれわれ

の理解も変化するという2主体的関係を組み込んでいる。お父さん(たとえられる方)が犬(たとえる方)であるシリーズ広告をみるうちに双方についての理解が変化している、ということの曖昧が見透かされていた。

それもそのはずで、一方を「オリジナル」といい他方を「コピー」というようにデマケーションがあるバイナリーコード・モデルは、いたるところに蔓延っている。[不]自然な相対化を招く「反」(反なる反、コピーのコピー)と、そこから遡及できるものであるとした「正」(正なる正、オリジナルのオリジナル)に対する、「合」(正なる反や反なる正、オリジナルのコピーやコピーのオリジナル)を引き出す2次化がなければ、論理階型を上げる第一歩はないが、実体寄りの三枝弁証法の「正-反」へ言語分析的に分け入り関係寄りの「差異⁷²-同一⁷³」の2次化Iになっていったということである。

誰がやっても同じになっていく収束や、応用されていることをもってしていう成功が、決して奇跡ではないといえるように、それらをうまく説明できるものがそれしかないならば、それは正しいとされる(奇跡論法⁷⁴)。これに対する批判には、いやそうして正しいとされたものすらも後になれば誤りであったとなるものである(悲観的帰納法⁷⁵)ということや、「マクロ/ミクロ」の不可知論(決定不全性)があるが、これらも決定的ではない。その過程で、その公理系のような言語対象と同一視された理論であっても、普遍性も必然性もない一般化なのであれば、まして社会科学のほとんどの理論も公理化できない理論であると認められるようになり、よって「相対化」がはじまった。論理実証主義に対しては、周知のようにつぎの点が問題視されていった。①意味の検証理論⁷⁶、②分析と総合の区別⁷⁷、③観察の理論の冗長性⁷⁸、④語の観察から文の観察への移行の困難性⁷⁹、そして⑤観察語と理論語の区別の曖昧性(多義性)⁸⁰。そして、これらの諸問題や、構成主義的経験論⁸¹からの批判にも答えてきた科学实在論は、さらに「理論は文の集まりに限らない表象としての、实在を単純化(理想化、抽象化)したモデルである」——公理化接近においては、文の集まりである理論、その理論の理解の補助手段であるモデル——

とする意味論的捉え方を、みずからの擁護と結びつけている。

以上を背景に設定して、複雑（単純）なシステムを目前にして、複雑（単純）な挙動・行動の原因を探る科学に対し、単純（複雑）な挙動・行動の原因を探る科学が、さまざまな科学の全般を覆い返していることを考えた方がいい。後者の科学は、本質とされる非線形な確定系（予測可能にする〈規約〉がある情報／資源系での表現型を現す）に生じる不規則な揺動現象というカオスを、安定なカオスもあるだけに、どこにでもある普遍な現象だという⁸²。また、科学における描像・記述についての、対象「そのもの」——現象論の追い求める観察可能なく現象〉だけに囚われない——の記述（モダン科学）と、対象とわれわれの関係についての知識の記述（ポストモダン科学）という区分⁸³に、温度差はあるが同調する傾向がある。そのなかで指摘されてきたポストモダンの諸特徴は、つぎのようにまとめられる。①相互に排他的だが両者が不可欠であるという相補性の重視、②固定的な存在論的カテゴリの軽視、③非線形性、不連続性、相互作用性や〔乱流的〕流動性の重視、④2元論的区分（2コード／2概念モデル）の超克、⑤記号体系の重視、⑥対象を完全に説明するための統一的記述を留保する多様な視点の尊重。ただし、周囲からポストモダン科学の類とされているものには、経験的側面を無視し、ひたすら言葉や論理だけによるが整然と理づめした言説、難解・不明瞭なそれに深淵さがあるという評判から厳密科学者も幻惑されるほどの言説がある。

経験に基づいた論拠は帰納主義、実証主義、現象論において重要であり、観察できる事実や価値から理論を抽出する方法の確立を目指すことには賛成である。たとえば、英の個人主義、米の競争的経営主義、独の協調的経営主義を比較追究することの中にある経営発展史上の経験知を獲得しているであろうとして、日本の経験知は終わらない歴史研究に重要なひとつの未来であるとされた⁸⁴。そういわれた日本の経験知も、先の図1に引き合わせ例示したことや、それ以前の日本の経験知を置き去りにした未来予測になるならば、浮薄な経験的論拠・証拠となり、リスク⁸⁵とハザードを伴う。

日本人の心性（メンタリティ）の無意識⁸⁶を意

識化しようとしたものであったが、鎌倉仏教以降に顕現したとされる霊性的自覚をいう無限大円環性モデル⁸⁷と、日本神話における3階（組）3項の神性から観取された中空性モデル⁸⁸がある。霊性的自覚にある即非論理（排中律を認めないという意味で矛盾許容論理である三価論理、即自と対自の相克関係から溶けだすような流体的な相即論理）には、「構造-現象-解釈」の2次化Ⅱによる動化が見てとれる。無限大円環性モデルの中心にある超個己（万差の個多そのものである絶対孤独の一人）と、貧弱なほどにしか語り継がれていない無為神の項の中空性モデルにおける中心化にしても、そして中空性モデルの地神などの項にしても、これに対する天神などの項にしても、「構造論（世界を客観化し、客観から主観を記述する）-現象論（客観化されているとする世界像を先ずは捨て、主観の内側だけに現れる意識に儘ならぬ不可疑性として客観を記述する）-解釈論（客観と主観を記述するのではなく、釈法で抉り理解可能な最小限満足をえようとする）」の循環を遮断したいずれかの観点が最前面化する。

こういうことから、非線形（超線形）がまたして線形化する。たとえば、「知-情-意」／「感-知-認」における、各系の2段階説は観察の理論負荷性をいう1段階説から批判されるが、他の1段階説を一手に回収し主観性の謎は終焉すると論断する特定2項の1段階説——双子説と表現する者がいる——といえども、糊塗（パッチ）の上塗り（進化の漸進説に整合的）であっていい。つまり、現実（至近な日常生活ないし遼遠な経験可能な世界）の一部は非現実（経験不可能な可能世界）になり非現実の一部は現実になることを、われわれは、内なる主観と外なる客観という主客対称化の構図下、あるいは内なる客観と外なる主観という主客非対称化の構図下で、「みえて／みえず」に生きている。

客観〔だとするもの〕はあって主観〔だとするもの〕はない、あるいはその逆だといひ、それでも「私と、私にとっての現象（私の経験）はある」というだけでは、それは個人主義である。そして、各々の構図内かつまたは構図間での均衡が、いかなる力にも奉仕するものではなく自発的に破れる（進化の断続説に整合的）においても、

説き伏せるもの-説き伏せられるものの解釈を共通理解に仕上げようとする構成があるのである。そこで、「みえる-みえない」／「現実-非現実」——みえないところでは論理がすべてであるといわれてきた——に対し、相互帰属がある（あるとする）からであるが、構造論、現象論、解釈論の観点を、われわれは迂回させるというよりは動化させているということの無意識に、前稿⁸⁹で言及した。無意識の意識化から生まれる力があるからである。

さても既述の2モデルを読解し、本論の行論に見合わせて、社会科学におけるパワー資源論の現実味を「心脳よりの知／身体寄りの感」における実在とアナロジカルである程度内でできるだけ純化し接合すれば、ひとまず以下のように書き換え（パラフレーズ）できる。

あたかも「空核」（空である中核）を浮かび上がらせるように、対立項（価値への「知・『内容〇規約〇共通理解』／情／意」）のあいだで力がめぐっている。ただし、そのうちにあるいくつかの均衡性のいずれかが破れたかにもよるが、なんらかの対立項に弁証法的とは限らない引き込む力（妥当性の力）がかかり、あるときそれが空核に入り込む。これによって、安定系になるとは限らない。残るその他の均衡性——新たな対立項（矛盾）をもくり込んでいる——により、ときとともに斥ける力（批否性の力）がかかるようになれば、その中核化した対立項は中核を離れ、もとの力のめぐりの中に収まるか、その外へ飛び出すことを永劫に繰り返している。もしもその外へ飛び出したとするならば、共通理解が成立する（レベルを上げれば通常という共認可能）という意味で公共（問主観）的な問題群における自由な個人という幻想をベースにして向かう一様性に対し、公共問題群の外（論理的には解決できない）の共通理解が成立しない（同様にしての共認不可能な）問題群における無意識の被拘束性がある〔探求〕共同体という幻想の多様性のうちに位置づけられるものであったということである。空核を擁する認識（考系）には、さまざまに制度化する生系上の権益の網またはソーシャル・ネットワークという網での「公式／非公式」な多中心認識とは異なるがこれがあることにもより、局在としての「妥当性

／批否性」の力が〔ポスト・ホックを含み〕当座のしかかる。空核は、このように有にもなり無にもなる。このことの良し悪しを、組織ないし社会の交変換における具体的対立項について専門的に考え下すには、長年月を経る。

この書き換えは、いまもポピュラーな日本鎌倉仏教からインド中観派仏教——日本諸宗の中の六宗のひとつである三論宗は中観派⁹⁰——に遡ると、論理的にはよりしっかりとしたものになる⁹¹。また、科学史上でも、前世界住人にとっての矛盾を矛盾としなくなる前世界住人を知る後世界住人がいる。そうして、絶えず広がる世界へ絶えず言語表現をかけてはなされる解釈が、先行モデル群とその前後諸モデルの「射映-構築」／「変容・異常化-標準・通常化」という離着陸関係として幾度か生成した。後世界住人である科学者たちは、彼らの解釈が中観派の還元的応用に映るといわれることを明晰化しようとしている。こういえば彼らがなんというかはともかくも、よって本論では、たとえば「AでもありBでもある」という解釈に対する「AもBもある」という解釈などが、「記述／説明」的な役割を果たすと認められていることを重視する。

物理学で実証された空は、実在的である。一方、「色(空)-空(色)」——俗-聖、出発-到達、コピー-オリジナル、で考えてもパラレル——における空の捉え方には相違がある。傾向的には二分し、〔六宗以外では〕言葉の止滅した空がいわれ、〔中観派では〕言葉に止滅のない「空」がいわれる。ここには、×をつけたままにはしない新しい意味への志向があり、ポストモダニズムとはそもそも異なっていた。というように、空の表現には浮遊がある。こうした相違は、2元化を通過して2次化すると、「実在-非実在」の2次化Ⅰと、「可変-不変」／「実体-関係」が折り重なること——このときばかりは、「実在-非実在」／「可変-不変」／「実体-関係」の2次化Ⅱとは断言できない——からの論争にもなっている。そしてここに根差すといえる、「閉ざされた-開かれた」というシステム（社会）区分もあったわけである。

このことはとりもなおさず、方法の方法である諸操作などの、そのカテゴリで可能な「形式-非形式」という論理区分を問い、論理法則を考え

ることになる。また、全体は、あるときまではますます観察できるようになっていくが、あるときからまったく観察できなくなるという捉え方がある。この捉え方からして、空モデルにあるとして球体イメージ批判ができるのは、球体が「空核を擁する器さえもない空」ということに対する器の見立てになっているというからであろう。実践にも理論にも、いつしか2項の「対立／対比」の仮観が生じる。仮観が充観に転じる一方には、2次化ⅠやⅡにより徐々に生じる「空観」がある。しかし、2次化Ⅲを超えて「2次化Ⅳ」（チャンクを超えた多項のうちの2項ずつの2次化）が連続と続けば、一般には、その果てに所記の転換の無限後退に瀕し、「言語の牢獄」といい倦ねる⁹²。ここには、「理論は空虚である⁹³」といわれたようにいいたくなる面があるであろう。

これに対し、本論では、「1元-n ($n \geq 2$)元」という仮観（充観）の2次化Ⅰや、「構造-現象-解釈」という仮観（充観）の2次化Ⅱによる空観、という仮観と空観が前面化する⁹⁴。そして、このような仮観と空観の別決には、鎌倉仏教以降の日本に背面化しているという意味で忘欠性があるので、むしろいまに回帰する日本的なものとする。その日本が置かれているグローバル化する全体が分解しないようにするには、グローバル化批判——外部消滅によるエントロピー法則問題——に答える必要がある。その別決には、「理論／実践」における一点の系列である過程でなにが空核に入り込むかの都度にその世界像の膜（ベール）を剥ぐ、空も縁起もない＜否定＞と＜肯定＞に対する、「否定」からの空（無でも有でもない）と「肯定」からの縁起（因果でもあり相関でもある関係）が結びつき持続する力——「空-縁起」の原初中観派の解釈——を、「空性」とコードする空核の照らしがある。

2デルの読解とその書き換えにはじまるここまでのことには、前稿⁹⁵で述べた「選択螺旋」という「現象与件-現象学的所与」から不自由な合理経験が、寝た子を起こすように一挙に呈示されている。このとき、われわれは、「語-文-言説-パラダイム」における「還元・カテゴリ化による帰納-創発・家族化からの演繹」／「制度-非制度」／「利権-権益」の中に、真綿で首を絞められ巻き

込まれているだけではない。よって、「法権力に代わる」規律権力モデルという移入モデルにもその残余が入り込み、書き換えられる。

おわりに

本稿は、本論の前提として、つぎのそれぞれがいかなるものであるかを明示化した。①自然科学的存在論と科学实在論的認識論、②社会交変系のカテゴリイズ、③「全」包括的系統論をいうときの1元論や多元論と包み披き論、④社会的存在としてのヒトの生の本質、⑤方法の方法と社会科学方法論、⑥科学観および公理化接近と非公理化接近の2重性、そして⑦選択螺旋という現象的所与を衝いた2大モデルのパラフレーズ。

また、それらを明示するうちに、前稿までにレビューし次稿でもレビューするマーケティング論バックグラウンドの先行理論との、離着陸関係がある後稿での見解にかかわる主要論点を含んだ。これらをあらためて列挙しておく。①構成的半实在論、②「心脳-身体」／「主観-客観」が対称化されたシステム論、③洗練された機能論とケイパビリティ論、④快樂-幸福論、⑤交際する協働存在、⑥A'もBもあるというなどの新解釈、そして⑦規律権力モデル。

これら主要論点についての見解を後稿で定め、その後々稿でマーケティング[超]組織個体のモデル化に向う。

*本稿は、日本経営診断学会関東部会（2015年7月18日、於立教大学池袋キャンパス）における筆者の第3報告「社会交変論の枠組みと論点」を内含している。

【引用参考文献】

- Abell, D. F., 1980, *Defining the Business: The Starting Point of Strategic Planning*, Pearson Education. (石井淳蔵訳、2012年、『新訳 事業の定義: 戦略計画策定の出発点』碩学舎)
- Bhasker, R., 2008, *A Realist Theory of Science*, Verso. (式部信訳、2009年、『科学と实在論: 超越論的实在論と経験主義批判』法政大学出版局)

- Black, M., 1962, *Models and Metaphors: Studies in Language and Philosophy*, Cornell University Press.
- Brink, D. O., 1989, *Moral Realism and The Foundations of Ethics*, Cambridge University Press.
- Chakravatty, A., 2007, *A Metaphysics for Scientific Realism: Knowing the Unobservable*, Cambridge University Press.
- Darwall, S. L., 1983, *Impartial Reason*, Cornell University Press.
- Giere, R. N., 1999, *Science without Laws*, The University of Chicago Press.
- Giere, R. N., 2006, *Scientific Perspectivism*, The University of Chicago Press.
- Gilovich T., D. Griffin and D. Kahneman, eds., 2002, *Heuristics and Biases: The Psychology of Intuitive Judgment*, Cambridge University Press.
- Hardin, G., 1968, "The Tragedy of the Commons," *Science*, 162 (3859), pp. 1243-1248.
- Hartley, D., 2010, *Understanding Human Need: Social Issues, Policy and Practice*, The Policy Press. (H. デイーン／福士正博訳、2012年、『ニーズとは何か』日本経済評論社)
- Kitcher, P., 1993, *The Advancement of Science: Science without Legend, Objectivity without Illusions*, Oxford University Press.
- Laudan, L., 1981, "A Confutation of Convergent Realism," *Philosophy of Science*, 48.
- Laudan, L., 1990, "Demystifying Underdetermination," in Savage, C. ed., *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, XIV, pp. 267-297.
- Mahner M. and M. Bunge, *Foundations of Biophilosophy*, Springer, 1997. (M. マーナ・M. ブーンゲ／小野山敬一訳『生物哲学の基礎』丸善出版)
- Markley, R., "The irrelevance of Reality: Science, Ideology and the Postmodern Universe," *Genre*, 25, 1992, pp. 249-276.
- Menzies, P., 1996, "Probabilistic Causation and the Pre-emption Problem," *Mind*, 105, pp. 85-117.
- Morgan, M. S. and M. Morrison, 1999, *Models as Mediators: Perspectives on Natural and Social Science*, Cambridge University Press.
- Nagel, E., 1961, *The Structure of Science: Problems in the Logic of Scientific Explanation*, Brace & World.
- Pshillos, S., 1999, *Scientific Realism: How Science Tracks Truth*, Routledge.
- Putnam, H., 1975.
- Salmon, W. C., 1984, *Scientific Explanation and the Causal Structure of the World*, Princeton University Press.
- Skinner, B. F., 1977, "Why I am not a Cognitive Psychologist," *Behaviorism*, 5 (2), pp. 1-10.
- Sokal, A., 1996, "Transgressing the Boundaries: Toward a Transformative Hermeneutics of Quantum Gravity," *Social Text*, 46/47, pp. 217-252. (A. ソーカル、「境界を犯すこと：量子力学の変形解釈学に向けて」、A. ソーカル・J. ブリクモン、2001年、『「知」の欺瞞：ポストモダン思想における科学の濫用』岩波書店、281～330頁)
- Sokal, A and J. Bricmont, 1998. (A. ソーカル・J. ブリクモン、2001年、『「知」の欺瞞：ポストモダン思想における科学の濫用』岩波書店)
- Tononi, G., 2004, "An Information Integration Theory of Consciousness," *BMC Neuroscience*, 5 (42), pp. 1-22.
- Tversky, A., and D. Kahneman, 1992, "Advances in Prospect Theory: Cumulative Representation of Uncertainty," *Journal of Risk and Uncertainty*, 5 (4), pp. 297-323.
- A. D. チャンドラー Jr. / 安部悦生ほか訳、1993年、『スケール・アンド・スコープ：経営力発展の国際比較』有斐閣。
- A. バーマン / 立崎秀和訳、1993年、『ニュー・クリティシズムから脱構築へ：アメリカにおける構造主義とポスト構造主義の変容』未来社。
- A. バラウド / 吉岡正道・杉村卓哉訳、2013年、『破壊的リスクに対する管理可能性：危機的管理と管理の危険性の相違』、芝健次・太田三郎・本間基照編著、『リスク管理とディスクロージャー』17～25頁。
- A. N. ホワイトヘッド・B. ラッセル / 岡本賢吾ほか訳、1988年、『プリンキピア・マテマティカ序論』哲学書房。
- B. ウィリアムズ / 森脇康友・下川潔訳、1993年、『生き方について哲学は何が言えるか』、産業図書。
- B. ラッセル / 高村夏輝訳、2007年、『論理的原子論の哲学』筑摩書房。
- B. C. ファン・フラーセン / 丹治信治訳、1986年、『科学的世界像』紀伊國屋書店。

- C. ヘンペル／長坂源一郎訳、1973年、『科学的説明の諸問題』岩波書店。
- C. G. ヘンペル／黒崎宏訳、1967年、『自然科学の哲学』185頁。
- C.G. ヘンペル／竹尾治一郎・山川学訳、1986年、「意味の経験論的基準における問題と変遷」、G. フレーゲほか／坂本百代編『現代哲学基本論文集Ⅰ』勁草書房、105～141頁。
- C. S. パース／C. ハートショルン・P. バイス編／米盛裕二編訳、1985年、『現象学』勁草書房。
- C. S. パース・W. ジェームズ・J. デューイ／植木豊訳、2014年、『プラグマティズム古典集成』作品社。
- D. バーリンスキ／林大訳、2001年、『史上最大の発明 アルゴリズム：現代社会を造りあげた根本原理』早川書房。
- D. ヒューム／大槻春彦訳『人性論(一)(二)(三)(四)』1948年、1949年、1951年、1952年、岩波書店。
- E. ネイゲルほか／大出晃・坂本百大監訳、1967年、『現代の科学哲学』誠信書房。
- F. ベーコン／桂寿一訳、1978年、『ノヴム・オルガヌム(新機関)』岩波書店。
- G. ドゥルーズ・F. ガタリ／宇野邦一ほか訳、2010年、『千のプラトール：資本主義と分裂症』河出書房新社。
- G. フレーゲ／土井俊訳「意義と意味について」、G. フレーゲほか／坂本百代編『現代哲学基本論文集Ⅰ』勁草書房、1～44頁。
- G. フレーゲ／三平正明ほか訳、2001年、『フレーゲ著作集2 算術の基礎』勁草書房。
- G. ベイトソン／佐藤良明訳、2000年、『精神の生態学』新思索社。
- H. パットナム／藤川吉見訳、1984年、『科学的認識の構造：意味と精神科学』晃洋書房
- H. パトナム／藤田晋吾・中村正利訳、2006年、『事実／価値二分法の崩壊』。法政大学出版会。
- H. ファイグル／伊藤康・萩野弘之訳、『こころのもの』勁草書房、1989年。
- H. ポアンカレ／吉田洋一訳、1953年、『科学と方法』岩波書店。
- I. ラカトシュ・A. マスグレーヴ編／森博監訳、1985年、『批判と知識の成長』木鐸社。
- I. ラカトシュ／村上陽一郎ほか訳、1986年、『方法の擁護：科学研究プログラムの方法論』新曜社。
- J. グリック／上田皖亮監修／大貫昌子訳、1991年、『カ
オス：新しい科学をつくる』新潮社。
- J. デリダ／若桑毅ほか訳、1977年、『エクリチュールと差異(上)』法政大学出版局。
- J. デリダ／足立和浩訳、1972年、『根源の彼方に：グラマトロジーについて(上)』現代思潮社。
- J. デリダ／高橋充昭訳、2000年、『ポジション』青土社。
- J. ボードリヤール／今村仁司・塚原歴訳、1992年、『象徴交換と死』、筑摩書房。
- J. ボードリヤール／竹原あき子訳、1984年、『シミュラクルとシミュレーション』法政大学出版局。
- J. ラカン／宮本忠雄ほか訳、1972年a、『エクリⅠ』弘文堂。
- J. ラカン／佐々木孝次ほか訳、1972年b、『エクリⅡ』弘文堂。
- J. ラカン／佐々木孝次ほか訳、1981年、『エクリⅢ』弘文堂。
- K. ゲーデル／戸田山和久訳、1995年、「ラッセルの数理理論学」飯田隆編監訳『数学の哲学 ゲーデル以後』勁草書房。
- K. ゲーデル／林晋・八杉満利子訳(解説)、2006年、『ゲーデル 不完全性定理』岩波書店。
- K. R. ポパー／大内義一・森博訳、1971年、1972年、『科学的発見の論理(上)(下)』恒星社厚生閣。
- K. R. ポパー／森博訳、1974年、『客観的事実：進化論的アプローチ』木鐸社。
- K. R. ポパー／藤本隆志ほか訳、1980年、『推論と反駁：科学的知識の発展』法政大学出版局。
- K. R. ポパー／内田詔夫・小河原誠訳、1980年、『開かれた社会とその敵 第一部』。
- L. ヴィトゲンシュタイン／丘沢静也訳、2013年、『哲学探究』岩波書店。
- L. ヴィトゲンシュタイン／野矢茂樹訳、2003年、『論理哲学論考』岩波書店。
- L. ローダン／村上陽一郎・井山弘幸共訳、1986年、『科学は合理的に進歩する：脱パラダイム論へ向けて』サイエンス社。
- M. ヴェーバー／祇園寺信彦・祇園寺則夫、1994年、『社会科学の方法』講談社。
- M. ヘッセ／高田紀代志訳、1986年、『科学・モデル・アナロジー』培風館。
- M. ボランニー／高橋勇夫訳、2003年、『暗黙知の次元』筑摩書房。
- M. マッスィミーニ・G. トノーニ／花本知子訳、2015年、

- 『意識はいつ生まれるのか：脳の謎に挑む統合情報理論』 亜紀書房。
- N. グッドマン／雨宮民雄訳、1987年、『事実・虚構・予言』 勁草書房。
- N. R. ハンソン／村上陽一郎訳、1986年、『科学的発見のパターン』 講談社。
- P. デュエム／小林道夫ほか訳、1991年、『物理論の目的と構造』 勁草書房。
- P. K. ファイヤーベント／村上陽一郎・渡辺博共訳、1981年、『方法への挑戦：科学的創造と知のアンキズム』、新曜社。
- R. E. ニスベット／村本由紀子訳、『木を見る西洋人 森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』 2004年、ダイヤモンド社。
- R. M. ヘア／内井惣七・山内友三郎監訳、1994年、『道徳的に考えること：レベル・方法・要点』 勁草書房。
- R. M. ロバーツ／安藤喬志訳、1993年、『セレンディピティ：思いがけない発見・発明のドラマ』 化学同人。
- R. ローティ／野家啓一監訳・伊藤春樹ほか訳、1993年、『哲学と自然の鏡』 産業図書。
- S. アイエンガー／櫻井祐子訳、2014年、『選択の科学』、文藝春秋。
- S. A. クリプキ／八木沢敬・野家啓一訳、1985年、『名指しと必然性：様相の形而上学と心身問題』 産業図書。
- T. ギロピッチ／守一雄・守秀子訳、1993年、『人間この信じやすきもの：迷信・誤信はどうして生まれるのか』 新曜社。
- T. クーン／中山茂訳、1971年、『科学革命の構造』 みすず書房。
- T. クーン／我孫子誠也・佐野正博訳。1998年、『科学革命における本質的緊張』 みすず書房。
- T. S. クーン／佐々木力訳、2008年、『構造以来の道：哲学論集1970-1993』 みすず書房。
- V. バー／田中一彦訳、1997年、『社会的構築主義への招待：言説分析とは何か』 川島書店。
- W. V. O. クワイン／飯田隆訳、1992年、『論理的観点から：論理と哲学をめぐる九章』 勁草書房。
- 池田清彦、1992年、『分類という思想』 新潮社。
- 井上円了／佐藤厚訳、2012年、『現代語訳 仏教活論序説』 大東出版社。
- 上野千鶴子、1985年、『構造主義の冒険』 勁草書房。
- 太田三郎、2009年、『倒産・再生のリスクマネジメント：企業の持続型再生条件を探る』 同文館出版。
- 大滝雅之ほか編、2015年、『社会科学における善と正義：ロールズ「正義論」を超えて』 東京大学出版会。
- 尾崎和彦、2002年、『スウェーデン・ウプサラ学派の宗教哲学：絶対観念論から価値ニヒリズムへ』 東海大学出版会。
- 梶山雄一・上山春平、1997年、『空の論理<中観>』 角川書店。
- 河合隼雄、1999年、『中空構造日本の深層』 中央公論新社。
- 鈴木大拙、1972年、『日本的靈性』 岩波書店。
- 瀬戸賢一、1995年、『メタファー思考：意味と認識のしくみ』 講談社。
- 竹田青嗣、2004年、『現象学は<思考の原理>である』 筑摩書房。
- 戸田山和久、2015年、『科学的事実論を擁護する』 名古屋大学出版会。
- 齊藤壽彦、2002年、『信頼・信認・信用の構造：金融核心論』 泉文堂。
- 中山茂編著、1984年、『パラダイム再考』 ミネルヴァ書房。
- 長谷川博、2001年、『マーケティングの世界：事象・技法・理論』 東京教学社。
- 長谷川博、2012年、『社会交変換論Ⅰ：選択螺旋と行動相互作用』、『国府台経済研究』第22巻第2号、127~145頁。
- 長谷川博、2014年、『社会交変換論Ⅲ：[超]組織個体記述への認識-方法/形式-内容 連関(1)』、『千葉商大論叢』第52巻第1号、17~33頁。
- 三上富三郎、1982年、『ソーシャル・マーケティング』 同文館。
- 米盛裕二、2007年、『アブダクション：仮説と発見の論理』 勁草書房。
- 吉田民人、1990年、『情報と自己組織性の理論』 東京大学出版会。

- 1 尾崎和彦、2002年、33~42頁。
- 2 H. パトナム／藤田晋吾・中村正利訳、2006年。
- 3 Mahner M. and M. Bunge, 1997, pp. 5-50. 以上に基づく。
- 4 N. グッドマン／雨宮民雄訳、1987年。以上に基づく以下がある。C. G. ヘンベル／黒崎宏訳、1967年、『自然科学の哲学』90-91頁。

- 5 M. ヴェーバー／祇園寺信彦・祇園寺則夫、1994年。
- 6 D.バーリンスキ／林大訳、2002年。以上参看のこと。
- 7 Gilovich T., D. Griffin and D. Kahneman, eds., 2002. ヒューリスティックスとバイアスはセットで用いられる。バイアスについては以下がある。T. ギロビッチ／守一雄・守秀子訳、1993年。
- 8 以下は、社会科学から排除すべき自然科学の濫用をいう。Sokal, A and J. Bricmont, 1998.
- 9 Bhasker, R. 1978. Black, M., 1962. Chakravatty, A., 2007. Giere, R. N., 1992, 2006. Mahner M. and M. Bunge, 1997. 戸田山和久、2015年。以上に負う。
- 10 米盛裕二、2007年。パースやポパーに基づく以上が分かりやすい
- 11 齊藤壽彦、2002年、25～39頁、71～72頁、88～89頁、103頁。
- 12 J. デリダ／高橋充昭訳、2000年、41～44頁。以上の解説に以下がある。A. バーマン／立崎秀和訳、1993年、379～396頁。差約は、差延の逆をいう本論の造語。
- 13 池田清彦、1992年、89～94頁。
- 14 L. ヴィトゲンシュタイン／丘沢静也訳、2013年、61～91頁。
- 15 R. E. ニスベット／村本由紀子訳、2004年、43～59頁、155～184頁。
- 16 T. クーン／中山茂訳、1971年、48～57頁。以上に基づく。
- 17 三上富三郎、1982年。
- 18 吉田民人、1990年、153～171頁。
- 19 Tononi, G., 2004, pp. 1-22. M. マッスイミーニ・G. トノーニ／花本知子訳、2015年、110～139頁。以上は現象学的であるといつて憚らない。
- 20 B.ウィリアムズ／森脇康友・下川潔訳、1993年、10頁。
- 21 Markley, R., 1992, pp. 249-276. 以上を変更。
- 22 長谷川博、2001年、347～354頁。行動指針になるやならずの原則や思想と、これらの排中律の否定に言及。
- 23 S. アイエンガー／櫻井祐子訳、2014年、269～275頁。
- 24 Skinner, B. F., 1977, p. 1.
- 25 Hardin, G., 1968, pp. 1243-1248.
- 26 長谷川博、2014年、21～24頁。
- 27 G. ドゥルーズ・F. ガタリ／宇野邦一ほか訳、2010年、15～61頁。
- 28 たとえば絆尺度の構築はホロンの最前面化に対応する。
- 29 R. M. ヘア／内井惣七・山内友三郎監訳、1994年。
- 30 J. デリダ／若桑毅ほか訳、1983年。
- 31 Nagel, E., 1961, pp. 535-546.
- 32 D. ヒューム／大槻春彦訳、1948年、325頁。
- 33 A. N. ホワイトヘッド・B. ラッセル／岡本賢吾ほか訳、1988年、127～275頁。B. ラッセル／高村夏輝訳、2007年、156～185頁。K. ゲーデル／林晋・八杉満利子訳（解説）、2006年、110～117頁、189～196頁。K. ゲーデル／戸田山和久訳、1995年、57～95頁。W. V. O. クワイン／飯田隆訳、1992年、119～155頁。L. ウィトゲンシュタイン／野矢茂樹訳、2003年、31～128頁、151～180頁。S. A. クリプキ／八木沢敬・野家啓一訳、1985年、25～237頁。R. ローティ／野家啓一監訳・伊藤春樹ほか訳、1993年。以上から言及は後稿で行う。
- 34 上野千鶴子、1985年、27～63頁。
- 35 Abell, D. F., 1980.
- 36 Dean, H., 2010. 以上でのニーズの形容詞は、多くの文で重要になるが、その説明はどこまで転用できるか。
- 37 B. C. ファン・フラーセン／丹治信治訳、1986年、5～8頁。
- 38 G. フレーゲ／三平正明ほか訳、2001年。
- 39 M. ボランニー／高橋勇夫訳、2003年、64～65頁。
- 40 以下では能記（シニフィアン）の浮遊をいう。J. ラカン、1972年a、7～66頁。
- 41 N. R. ハンソン／村上陽一郎訳、1986、11～66頁。以上が詳しい。
- 42 大滝雅之ほか編、2015年、151～168頁。
- 43 J. デリダ／足立和浩訳、1984年。
- 44 D. ヒューム／大槻春彦訳、1948年、198～270頁。
- 45 K. R. ポパー／大内義一ほか訳、1971年、1972年。K. R. ポパー／藤本隆志ほか訳、1980年。
- 46 P. デュエム／小林道夫ほか訳、1991年、247～256頁。
- 47 P. デュエム／小林道夫ほか訳、1991年、247～256頁。
- 48 W. V. O. クワイン／飯田隆訳、1992年、31～70頁。
- 49 N. R. ハンソン／村上陽一郎訳、1986年、41頁。
- 50 T. クーン／中山茂訳、1971年。T. クーン／我孫子誠也ほか訳。1992年。
- 51 以下により成り立つ。①観察による問題発見、②問題解決の仮説提起、③仮説からのテスト命題の

- 演繹、④テスト命題の検証及び確証または反証。
- 52 V. バー／田中一彦訳、1997年。
- 53 I. ラカトシュ・A. マスグレーヴ編／森博監訳、1985年。
I. ラカトシュ／村上陽一郎ほか訳、1986年。
- 54 L. ローダン／村上陽一郎・井山弘幸共訳、1986年、
95～159頁。Laudan, L., 1990, pp. 267-297.
- 55 ローダン（ラウダン）の捉え方については、この
点で再考の要がある。
- 56 カール・R. ポパー／森博訳、1974年、317～321頁。
- 57 C. ヘンペル／長坂源一郎訳、1973年。
- 58 Salmon, W. C., 1984.
- 59 Menzies, P., 1996, pp. 85-117.
- 60 Kitcher, P., 1993.
- 61 M. ヴェーバー／祇園寺信彦・祇園寺則夫訳、1994
年、84～85頁。以上でいうことの端的な例である。
- 62 竹田青嗣、2004年、24～88頁。以上に基づく。
- 63 K. ゲーデル／林晋・八杉満利子訳（解説）、2006年。
15～72頁。
- 64 N. グッドマン／両宮民雄訳、1987年。
- 65 R. M. ロバーツ／安藤喬志訳、1994年。
- 66 T. S. クーン／佐々木力訳、2008年、253～267頁。
- 67 瀬戸賢一、1995年、186～206頁。メタファーとア
ナロジーの相違は以上が分かりやすい。
- 68 M. ヘッセ／高田紀代志訳、1986年。
- 69 J. ボードリヤール／今村仁司・塚原歴訳、1992年、
118～129頁。
- 70 Black, M., 1962, pp. 38-47.
- 71 Black, M., 1962, pp. 35-36. P.38. p45.
- 72 G. ベイトソン／佐藤良明訳、2000年、428-434、
597-617頁。以上を参照されたい。
- 73 G. フレーゲ／土井俊訳、1986年、1～44頁。H. フ
ァイゲル／伊藤康・萩野弘之訳、1989年、97-105頁。
以上を参照されたい。
- 74 H. パットナム／藤川吉見訳、1984年、25～36頁。
- 75 Laudan, L., 1981, pp. 19-48.
- 76 C. G. ヘンペル／竹尾治一郎・山川学訳、1986年、
105-141頁。
- 77 W. V. O. クワイン／飯田隆訳、1992年、31～70頁。
- 78 T. クーン／中山茂訳、1971年、25～85頁。
- 79 Nagel, E., 1961.
- 80 E. ネイゲルほか／大出晃・坂本百大監訳、203～
204頁。
- 81 B. C. ファン・フラーセン／丹治信治訳、1986年。
- 82 J. グリック／上田院亮監修／大貫昌子訳、1991年、
10～22頁、507～530頁。以上に基づく。
- 83 Sokal, A., 1996, pp. 217-252. この区分自体を否定す
る者もいる。
- 84 A. D. チャンドラー Jr. /安部悦生ほか訳、1993年。
- 85 太田三郎、2009年、3～32頁。以上では、起こる
と分かっている事物、起こると分かっていない事
物に直面するときのリスクに区分し、後者を不
確実性という。また、リスク下での判断をいう
プロスペクト論については以下を参照されたい。
Tversky, A., and D. Kahneman, 1992, pp. 297-323.
- 86 心身が相関する意識（夢を見ない眠りにつくると消
えるもの）に対する無意識はどこにあるのか。深
層心理や形式、あるいは身体にあるとする構造化
がある。また、無意識は、そもそも「心的」とい
えるのかともいわれる。
- 87 鈴木大拙、1972年。
- 88 河合隼雄、1999年。
- 89 長谷川博、2014年。
- 90 井上円了／佐藤厚訳、2012年、68～115頁。
- 91 この論理形式の言及に以下がある。梶山雄一・上
山春平、1997年、131～144頁。
- 92 厳密（C洗練）化された数学記号による多変量解
析においても、ほどほどに変数選択されている。
- 93 H. ポアンカレ／吉田洋一訳、1953年、289頁。
- 94 C. S. パース著／C. ハートショルン, P. バイス編／
米盛裕二編訳、1985、7～41頁。以上でいう第1
性-第2性-第3性は、構造-解釈-現象と、同一の
置換群にある。
- 95 長谷川博、2012年。